

天草方言で読む本邑の民話

行人岳の行者さま（本町 福岡）



ろ行人岳にゃ白か髭ひげバもじゃもじゃ生なやした行ぎ者みどんの

たいぎゃにゃ昔の話ばって、どっから来なしたもねエ

棲すみちいとらしたつちゆうタイ。

「わしの この一本歯の下駄げたは、なかなか履はき心地こしちが良よろしい。この下駄を履いとれば、鶴から行人岳の頂上まで、あつと言う間に上り着くことができるわい」ち言ちいながら行者どんなひよいひよいて跳とび回まらつとちゆうモン。

近所きんじよン衆しゆいたちも、あんまり調子てうしンゆう跳とび回まらすもんじゃつで「こりゃあ大したもんバイ、天狗てんぐどんのごたる。一本歯いっぴんばン下駄げだで跳とび回まらすトン、よつぽで修しゆ業ぎやうば積つんどらす偉えらか人ひとじゃろうだな」ちめて感心かんしんしたり、そぎゃん評判へいぱんば聞きつけて、わざわざ遠とほうか所ところら見物けんぶつ人ひとまで来きらすごてなつたつちゆうタイ。

行者ぎやうどんなネ、人も住まん山奥さんおくで草くさてるん木の実みてろん生物なまもんばあつかり喰くうて七年しちねん余あまりも激はげしか修しゆ業ぎやうバさしたちゆうけん、とうとう一本歯いっぴんばン下駄げだ履ふんで跳とび上あがったり、空そらバ飛とうとさるかすごてならしたつちゆうタイ。

「ようし、こんどは雲仙岳うんせんがくまで飛とんでみせよう」ちめて行者ぎやうどんな太ふか手てバえつとばっかり広ひろげて、お堂だうンに

きん大岩ン上エ ひょいっち立ち上がった「おいっちに
いノ」ちゅうて膝バ曲げ伸ばして弾みバ付けてゑえて、
一本歯ン下駄で大岩バ蹴りつけらしたとん、ブーンちゅ
てうなりばあげてアツちゅう間やに行者どんナ大空さね
舞い上がったらしたっちゅうワイ。

グワッソんち、地響ンしたち思うたりや、両手両足バ揃
えたまま、雲仙岳ば目がけて飛うではってかしたっちゅ
ワイ。そして雲仙岳に着陸さしたち思うたりや、またじ
き行人岳さにや飛び戻って来らすとちゅた。

何様そりゃあそりゃ血の出くるごたる修業ばさすとち
ゆうで、あぎゃん術がでくるごてならした訳じゃっかい。
ソん内い、行者どんにや弟子のちいて、ひんがみゃあ
日弟子たちにも烈しか修業ばさせらすとちゅたい。

ところが、ある日のことじゃっかい、行者どんの留守
ばよかことに「俺りも一本歯の下駄ン威力バ試して見ゆ
う。雲仙な無理でん、ロノ津ぐりやアまでなるバ飛びき
っど、力はまあだまだばってん、なあんのこん一本歯の
下駄バ履ンどれば大丈夫じゃろ」ちゅうて、あん大岩ン

上に立ってゑえて「エイッ」ちゅて飛び上がったっちゅ
たい。

「こりゃあんびゃんゆういったバイ、何の事アなか、
風ン流れにゆうっと乗りしゃかすればロノ津までだ屁の
こっばじゃもね」

ところがじゃっかい、ちょうど鬼池ン海にさしかかっ
た時、なんさま強か海風ンびゅくんちゅて吹き付けてき
たっちゅうもん、こっじゃどうもこもならでにや弟子や
調子とりそくのうて、海岸の岩ン上さん「ズテーン」ち
ゅて墜落してしもたっちゅワイ。

（雲仙が見える海岸の岩の上には、その時の足形が今で
もまだ残つとるそうです）

「カーッ、このわしに、ことわりもせエでにや、一本
歯ン下駄バ履んで飛ぶちゅは何ごつか、けしからん奴じ
ゃ。お前はまあだまだ、修業が足らん」ちゅうて、行者
どんな太か声で目玉ンふっ飛びづるごて、しこたま弟子
におごられたっちゅじゃっかい。

こん行者どんの住んどらす行人岳はにゃあ、初手エか

ら島原てろん鬼池てろん漁師どんたちの方角は見定むる
目星めほしにしとらいたちゅもん。行人岳と高木山があすこ
じゃけんちゅう目測めくせんで漁場りようばてろん舟ン進路バ決めたりし
とらいたもんじゃっかい。

ある日ン事、鬼池ン漁師どんが辺あたリン暗うなるまで、沖おき
で漁りようバしとらいたちゅもん。その日は、面白かごて魚ン
釣れてねえ「こがん釣るったア珍しかこっバイ。あと五、
六匹釣ったろう戻ろうバイ」ちゅて、ひとりごっどん言
うとらいたりゃ、ひょくっと曇くもってしもうて海が時化しけじ
ゃあてネ、波は高こうなるし大嵐おおあらしになってしもうたっち
ゅタイ。こまあか舟じゃっで、ちようど木の葉ンごて、
揺れじゃあてない。

「こりゃちゃんしもうた、釣りに夢中になっとなったり
や雲行きも見えんごてきやアひなった。目星めほしン行人岳も
どっちじゃいろ、さっぱり判らん。こぎゃんなったろバ
行人様にんぎやうにお願いするより他無かバイ」ちゅて漁師は手バ
合あわせてから「行人様、どうかお助け下っせ、お礼詣れいぎで
にゃ新しか一本齒ン下駄ばお供え致しやすけん。どうぞ

お頼ん申します」ちゅうて、一生懸命いっしょうけんめい拜んもさいたっち
ゅうワイ。

そのからいいときしたりゃ遥はるかか彼方かなたン山ン方にボク
ツちゅ光りの浮き上ってネ、チカチカ瞬まばたきだしたトン、



真っ暗かった海が次第に白みかけたっちゅうワイ。

「あッ、あれは確きゃア行人様ンお灯ばい。有難たや、有難たや、これで助かったア」ちゅうてネ、急に元氣付かいた漁師どんな、ソノお灯バ頼りに力いっぴや漕ぎ出さいた処が、アツちゅう間に鬼池に戻りちいて命びろいさいたっちゅじゃっかい。そぎゃん事ンあってから、

「何ちゅうありがたかこつじゃろうかいまこて、行人岳ンあん不思議なお灯あかりは行人様ンお導きじゃったに違やあなか、じゃろうじゃろう、たしきゃアそぎゃんバイ」ちゅうて、漁師どんたちや、どんこん有難がってにゃあ、毎年行人様に、一本歯ン下駄バお供えしてサイ、豊漁ほとつりと安全祈願のお参りに来らすごてなった、という話じゃっかい。

こつで、しみゃあ

※今でも旧暦三月の彼岸の入りの頃、行人様のお祭が行なわれ、地元の福岡地区の人たちはもちろん、鬼池宮津の漁師さんたちも行人岳に登り、お参りに訪れています。お堂の裏手には行人様のお位牌が祀られており、その石碑に着いている青々とした苔を、少しずつ剥いで持ち帰り、御守りにしているそうです。

灰の中のかきもち（本町 福岡）

昔ーし、福岡ン聖福庵チユー所え、年寄りの庵主さんと小僧さんが居らした。

庵主さんナ、旨かもんナいっでんわーがばっかって喰いよらしたっチウモン

ある日の事ジャツカイ、庵主さんが小僧バ呼んで

「ランポン油ン切れたケン、寺領ン油屋に行たて買うて来て呉れい」

ちゆて、使いに出さしたっチウタイ。

小僧が出掛つとバ見届けた庵主さんナ、戸棚ン奥になわしとった欠き餅バこそーっと取り出やーて、囲炉裏ン薪の灰の上に並べて、焼き始めらした。

小僧は一升瓶バぶら下げて、どんどん坂道バ駆けおりて、二反首ン橋ンところまで来た時、ひょくっと立ち止って

へ今のうは、庵主さんナわーが一人で、んまか物バ喰い

よらすちやかろうかネ

そぎゃん思うたりや、小僧は矢も盾もたまらんごてなつて、今来た坂道バ一散掛けで引き返した。

庵の中はシーンと静まり返って、物音一つせんバッテ、何じやい香ばしか匂いのプンプンしてくる。

小僧は、生唾ン出てくつとバぐつとこらえて、障子ン穴



から中ン様子バじーっと覗いて見たりや、庵主さんナ何
じゃいんまかりそうに喰いよらす。

いっとき様子バ見とったバッテ、腹が「クー」チ鳴り
だすもんじゃって、なん様欲ゆるしてたまらんごてキャ
ーひなつた。

小僧は、障子バ「ガラー」チュテ開けて、息ア引切る
ゝごてして、

「庵主さん、油代バきゃー忘れたケン戻って来たばナ」
チ言うたもんじゃって、庵主さんナうっ魂がって、焼き
よらした欠き餅バ、うろたえて薪の灰ン中きゃー、押し
込みよらす。

「くそ慌て者が、引き返して来る奴があるか、銭な明日
でん良かったてえ、まこてーま」

慌てとらすとは、庵主さんの方じゃっかい。

小僧は、囲炉裏の火箸バ取り上げて囲炉裏ン薪の灰ン
上エ道順バ書きながら

「石段バ、トントントンちめて駆け降りて、こっちさん
曲がってから…」

ところが、薪の灰ン中きゃー、んまかりそうに焼けた
欠き餅ン二つ三つ出て来たもんじゃって「うわああ、こ
けにゃかきもちのあつとぞ、こりゃんまかばい」ちめて
小僧は、庵主さまにゃ見せびらきゃーとって、喰い始め
た。

「そりから坂道ば走り下って二反首ン橋ン…」
ち言いながら、火箸ば掻き回すたんびに薪の灰ン中から
欠き餅の次々出て来る。

小僧は、出てくる片っ端から、いち喰うてしもうたっワ
イ。

庵主さんな小僧が、んまかりそうに喰うとば

へいまいましい奴っじゃ

ち思いながら、どがんもしょんなかもんじゃって、じっ
と見とらすばかりじゃったちゆたい。

そぎゃんことンあってから、庵主さんなわあがばっか
りで喰わあでにゃ、小僧にも同じごて

分け与えて喰あせらすごてならしたちちゆたい。

こっでしみゃあ

天人女房（本町 新休）

昔、広瀬川上流の新休というところに七尋淵ちゅう川があった。

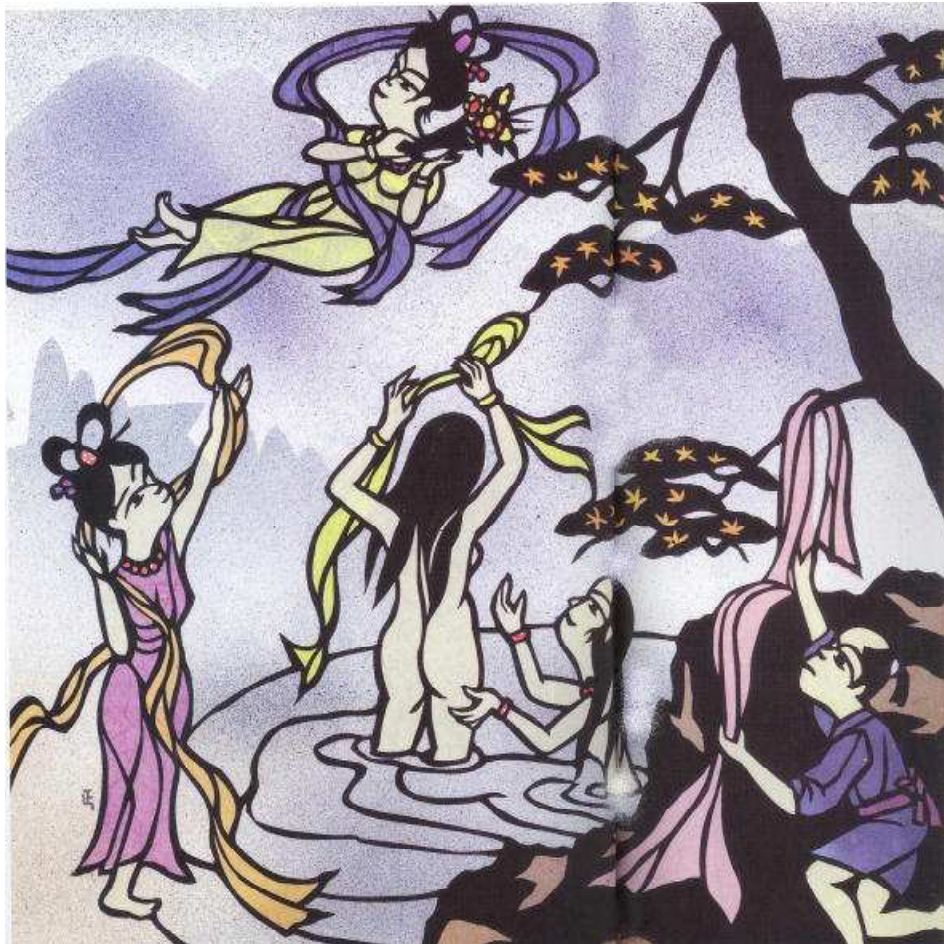
ある日、みぞうか天女さんたちが舞い下りて来て水遊びバしよらしたちゅうもん。

天女たちは、脱いだ羽衣は川ン端ン松の木ン枝にひっ掛けて、泳ぎに夢中になつたらしたちゅうじゃっかい。

丁度そけえ通り掛かった近くの若者が、初めて見る光景に「こぎゃん綺麗えか着物な見た事もなか、どりゃいっちよあたこっして、びっくりさしゅうかい」ち思つて一番綺麗えかっぱ草原や隠いて、様子ば見とったちゅうた。

いっ時したりや、天女たちはそれぞれ羽衣ば着て、天さね舞い上がってしまわしたちゅうた。

ところが、一番別嬪の天女さんな自分の羽衣ン無かもんじゃっで、一人そけえうっ座って、泣き出さしたちゅう



ゆじゃっきやあ。
若者な気の毒うなつて「どぎゃんしなしたかあ」ちゅう訳ば尋ねてみたりや「私は天から舞い下りた天女です。着物がなければ天に帰る事が出来ないのです」ち言



うて、またえつとばかり太か声じゃあて泣き出さずも
んじゃって、若者なみぞげしなってへ出してやりもそう
かにゃあぐち思つたばってんか、あんまり天女さんが別嬪べっぴん
じゃらすもんじゃって、わざと知らんふうりして様子ば
見とらいたच्चゅたい。

天女さんなしよんなかもんじゃって、泣き泣き若者ン
の家さん、ちいて行かしたच्चゅたい。

若者ンの家にゃ犬は一匹飼うとらいたच्चゅうとん、
ソノ犬が、寝っ時でん、天女さんの側から離れんごてし
て、あんまり懐くもんじゃって、天女さんもひどうみぞ
がりよらしたच्चゅじゃっきゃ。

天女さんな、娑婆しやばにも住み馴なれ、二人はとうとう結ば
れて毎日幸せに暮らしとらしたच्चゅうもん。

そうこうしとる内、三年経ったけん、もう着物ば出し
てやったच्चゅア天さね戻ったりやさすみゃあち思つて
出してやらいたच्चゅうたい。

ところが、天女さんな、嬉うれっしゃ、着物ば着てみよら
したच्चゅうとん、

そんまゝ天さね、昇あってはってかしたच्चゅもん。

若者な女房が恋しくて、恋しくてへどがんなつとして
天さね行たて、女房に会いたいぐち思つて、夜も眠らん
ごて案じてばかりおらいたもんじゃって、つらも青垂あおた
れて半病人のごてなつとらいたच्चゅうもん。

ある日、あんまり若者がしよげこくつとるもんじゃつ
てみぞげに思つた東向寺んご前様が「今日ん内い、庭の

真ん中に糸瓜へちまの種バ蒔いて、回りに百足の草履ぞうりバ埋めておくがよか。そうすればあんたの望みが叶えられるじゃろう」ち言わすとちゆうもん。

そりば聞いた若者なそりからじき草履ば作り始めたばってん、九十九足しきゃ作らん内ィ、日の暮れてしもうたっちゆうたア。

「どい、出来たしこた。しよんなかもね」ちゆて、糸瓜へちまの回りに埋めらいたっちゆうもん。

あくる朝、目ン覚めてみてうっ魂消えたのなんの、まこて糸瓜や一晚の内い伸びれば伸びるもん、天まで届いとったっちゆうわい。



若者な喜こうで、じきい登り出さいたりや犬も後からちいて来とちゆうもん、ところが天まであと一歩ちゆうとところで糸瓜へちまンつるが届かでにやおとちゆうたい。

へこりゃ困ったね、どぎゃんしたもねろゝ思案しつぽしたらりや、犬が若者の肩から天まで跳上がって尻尾しつぽばすうっちゆて差し出したもんじゃって、それえ掴つかまって天さね上らしたちゆうた。

再会できて二人は嬉うれっしやいつまっでん抱き合うとらしたっちゆうわい。

そん天女さんが実は七夕さまで、若者が犬飼いぬかひさんにならしたちゆうお話しじゃっかい。

こっでしみや